

社会学の最前線

第8回「性差別とミソジニー」について

202211764 佐々木ゆい

講義内容 (1) 選択的夫婦別姓制度

- 現在、日本では夫婦同氏原則を採用
→妻の改姓割合が圧倒的に多い
- 選択的夫婦別姓制度の導入に関する議論も提起されてきたが、反対論が根強く、いまだ導入は見送られている

1

講義内容 (2) 反対論の分析

- 「選択的」であっても夫婦別姓に反対する論理とは？
→計量テキスト分析：ウェブアンケートの自由記述を利用し、「必要」という語に焦点を当てる
- 結果：多くが「必要ない」という文脈で使用されていた
- 反対派は以下の3パターンに分類可能な不要論を展開
 - ①日本に不要
 - ②法や社会にとって不要
 - ③個人にとって不要

2

講義内容 (3) “不要論”とミソジニー

- ケイト・マン：
ミソジニーを「政治的現象としての理解が最も生産的」とし、
家父長制的社会秩序について 性差別主義→正当化の論理を提供
ミソジニー→逸脱者を監視・制裁
⇒新たな制度導入というジェンダー化されたニーズを退ける
不要論は、性差別ではなくミソジニーの現れと言える
- 現在不利益を被っている女性のニーズの価値を相対的に過小評価している
- 世界や日本でもミソジニーに関する論争は続いている。

3

講義を踏まえた考察 (1)

- 社会全体への影響を考えた時に結果的に自分に降りかかる不利益（制度の変更への嫌悪など）を理由にしている人もいる
- 今は様々な性のあり方の尊重に取り組もうとする風潮にあるが、自分と違う性の在り方を受け入れられない人も一定数いるはず
→そのような部分にもミソジニーは現れる？
- 反対派の多くの論理はそもそも「選択的」制度であることを考慮していない？
→現行の夫婦同姓制度に別姓にする自由が加えられるだけで、「この制度はあってはならない」という意見でない限り、反対派の論理は論破されるのでは

4

講義を踏まえた考察 (2)

- 夫婦が別姓を選択した場合の不利益や問題点について言及する反対論は、夫婦別姓のニーズの優先順位を低く見積もることを前提としている
→現在不利益を被っている人々を無視していることに気づいていない可能性
- 女性のミソジニーは、「女性という同じ立場なのだから」という論理に基づく在り方の認識の強要が起こりやすい

5

チュートリアルを踏まえた分析 (1)

- 社会で長く浸透してきた「型」から逸脱している人は大抵の場合マイノリティであり、マジョリティから「普通じゃない人」「自分とは違う人」というレッテルを貼られることも
→選択的夫婦別姓制度に限らず、ジェンダーに関する不平等の問題が扱われるときに、そのような前提が根本的にある限り議論は進まないのでは

6

チュートリアルを踏まえた分析 (2)

- 現在は性のあり方の多様性や家父長制秩序からの脱却を目指す方向に進みつつある
→が、家父長制秩序の中で長年生きてきた人々(高齢者世代)の深く染み付いた従来の価値観を崩す決定打になることはおそらく困難

一連の問題の根本的解決を図るには、人々が日常的に目にするところに社会的マイノリティの存在について理解してもらう工夫をする必要がある

7

参考

- 社会学の最前線 第8回 講義スライド
- 社会学の最前線 チュートリアル 講義

8